黒人研究の会会報

Japan Black Studies Association Newsletter No.79 (March 13, 2015)

第７９号　　２０１５年３月１３日

例会発表要旨

１０月例会　２０１４年１０月２５日　国士舘大学梅ヶ丘学舎

①　「西洋音楽」との対比に見る「黒人音楽の特性」

山本　愛

黒人の音楽性を本質から知るためには、現代に私たちが持っている西洋的な音楽概念を知ることから始めなければならない。現代の私たちが「音楽」と呼んでいるものの大半が西洋音楽を基礎としているからである。「西洋音楽」とは何かを知り、その上で「黒人の音楽」とは何かということを考える必要があるのだ。そこへ照らした時に見えてくるものとは、西洋の合理性と楽譜という記録のシステムによって、作曲者の意図を「再現する音楽」であるのに対し、黒人の音楽とは（また、その他多くの民族音楽も同様に）耳から耳へ、身体から体へ伝承し、本能的にまた、感覚的に音楽を創造し「自由な音楽」を求めていくという大きな違いが見られる。黒人音楽に元々楽譜は存在しない。むしろ西洋の音を記号化するという発想が世界的に見ても特殊なのである。ここでは、どちらが優れているかなどという事を言いたいのではない。記号化したために多くの人々が同じ音楽を共有することができた。

しかし、情報に縛られ、自由に身動きが出来ないというデメリットも生まれた。黒人の、特にアフリカに見られる即興性や、短いフレーズをいつまでも繰り返すスタイルはジャズやブルースやゴスペルへと進化し、その自由さと解放感を演奏するものと聴く者の両者に与えることになった。アフリカの持つ、多様性や複雑な他民族との関わりを思えば、一口にアフリカとは言い難いが、やはり、黒人にしか見られない普遍的なリズムや唱法、独自のスタイルというものが「自由」という人間が永遠に求めるテーマを生み出していると思われてならない。

② 1864 年再訪：ピロー砦の虐殺、黒人市民権、再建

加藤（磯野）順子

南北戦争 150 周年にあたり、戦争全体における 1864 年の意味および現在との関連性について考察した。開戦以来リンカンが固執した「連邦維持のための戦争」は前年の奴隷解放宣言によって「奴隷解放のための戦争」に変わり、翌 1864 年は「奴隷制廃止後の国家」を形成する準備に入った年であると言える。同時に、黒人が白人と法的に平等になることが現実味を帯びたことによって、黒人に対する白人の憎悪が激化した年でもある。

1864 年には奴隷州３州および連邦準州において奴隷制が廃止され、連邦政府は「逃亡奴隷取締法」も撤廃し、奴隷制廃止の流れに拍車がかかった。さらに、前年の北軍黒人部隊の活躍にも後押しされ、この年から黒人兵と白人兵の給与が同額になったことは人種間の平等を前進させた。また、連邦政府は、戦闘で失った労働力を補うべく移民を奨励する法案も通し、いわゆる「新移民」が戦後アメリカの人口構成を変えていく端緒を開いた。

一方、黒人兵を守るための一般令をリンカンが通達した翌 1864 年、テネシー州ピロー砦では 195 人の黒人兵と 102 人の白人兵が、後に KKK を率いるネイサン･フォレストの部隊に虐殺された。戦後頻発することになる黒人の市民権行使を暴力で阻止する事象は、すでにピロー砦に兆候が見られた。

しかし、虐殺を契機に連邦政府は黒人兵遺族にも年金を支給することを決め、本来、法的には存在しなかった奴隷の家族を認定する作業が始まったことは黒人の市民権獲得に重要な意味をもつ。

１１月例会　２０１４年１１月２２日　キャンパスプラザ京都

① 洞窟からハウスそしてホームへ――『ソロモンの歌』の新たな読み

山野　茂

トニ・モリスンはエッセイ「ホーム」の中で「ハウス」と「ホーム」を二項対立的なものとして捉え、「ハウス」を家父長制の大きな家で「閉ざし」「(人を）圧迫する」ものとし、「ホーム」を「開放的」「寛容的」で人種差別が解消されたものとしている。「ハウス」と「ホーム」はモリスンが『青い眼がほしい』以来一貫して追究してきたテーマである。発表はこの観点から『ソロモンの歌』を分析したものである。主人公ミルクマンの父親メイコンとその妹パイロットはそれぞれ「ハウス」と「ホーム」を象徴する人物として描かれている。父親が撃ち殺された後隠れ住んだ「洞窟」はそこでの殺人と金塊をめぐって二人が喧嘩別れをする場所で、「ハウス」と「ホーム」への分岐点となっている。不動産業者となったメイコンの家はモリスンがエッセイで定義した「ハウス」を忠実に体現した家で、白人中産階級的価値観を象徴しており、虚栄そのものである。一方パイロットの家は原始的な家であるが「歌」があり笑いがあり

一緒にいることそのものを共に楽しむ家である。パイロットが象徴する、生きることの尊重、食べ物の共有、人間関係の尊重、和解、死者の尊重、歌を通した伝統文化の継承にモリスンの「ホーム」観が投影されている。しかし一方で溺愛していた孫娘ヘイガーの狂気の果ての死とギターの狙撃によるパイロット自身の死は、人種差別と中産階級的価値観が絡み合ったアメリカ社会の深刻な病理性と人種差別を解消するために暴力を正当化する思想の欺瞞性、残忍性を明らかにするのと同時に、『ソロモンの歌』に描かれた「ホーム」像の限界を示している。

② Maya Angelou Remembered／感動のその語りを観る（Moyers & Company Video）

山本　伸

今夏（2014 年）、8 月 14 日、発表者がシアトル滞在中に TV 放映された Moyers & Company 制作によるドキュメンタリー *Maya Angelou on Facing Evil*。あまりの感動にしばらく呆然としたのち、機会があればぜひ例会でシェアしたいと YouTube を探したところ、同じものを発見、今回の鑑賞となった。収録はさかのぼること 1988 年のテキサス州ヒルカウンティ。長さは二十数分。

前半はストリートを歩きながらの回想が中心となっていて、線路よりも先へ進むことが黒人にとっていかに危険であったか、大人になった今でもその先に行くのは嫌だと語って引き返す。しかし、そうは言いながらも、表情にはそれを乗り越えてきた余裕というか、力強さのようなものがにじみ出ていることも確かだ。

後半はアンジェロウの講演。数ある講演のなかでも最も感動的なもののひとつだと確信できるだけの説得力と表現力に富む。完璧である。彼女の人生が波乱万丈であることは今更言うまでもないであろうが、それだけではあの爆発的な感動は生み出せない。言葉を話すのをやめたあの五年間に読み貯めた何百何千という書物から得た文学の力こそが、再び声を取り戻したアンジェロウの息をのむ朗読力と目を見張る表現力となって立ち現れているに違いない。

そういえば、5 年ほど前に知人を介して会えるかもしれないと打診を受けたことがあった。思い切って受けておけばよかったと後悔する。その声と語りを生で聴いてみたかった。その語りは、アメリカ黒人女性文学の、いや世界文学の最大級の遺産として広く長く記憶されつづけることであろう。

１２月例会　２０１４年１２月１３日　立命館大学諒友館

Amitav Ghosh の *River of Smoke*：阿片貿易と自由貿易論

加藤　恒彦

『煙の河』（2008 年）は、アミタブ・ゴーシュのアイビス三部作の第二作目である。『煙』は、第一作の『ケシの海』同様、インド洋を渡り、海外に自由を求めたインド人たちの物語であるが、『ケシ』がモーリシャスでの新生活を求める人々の物語であるのに対し、『煙』は、中国の広東（広州）との阿片貿易に従事するパーシ教徒のインド人貿易商を主人公とする物語である。

本論では、阿片戦争とは何であり、何故起こったのか、そして阿片戦争における中国の敗北の世界史的意味、そしてその幕末期の日本人にとってのインパクトについてまず論じた。そして、ゴーシュが『煙』で阿片戦争前夜の広東の外国人居留地での一連の事件に焦点を当て、それを外国人コミュニティの視点から描いた、という点に着目し、その意味について 4 点に整理し、その観点から作品を分析した。

では、阿片戦争前夜の広東で起きた一連の事件とは何であったのか？それは、清の道光帝が阿片撲滅を決意し、優秀で清廉潔白な高級官僚林則徐を特命長官に任命、広東に派遣し、イギリス人の阿片貿易商から阿片を没収・廃棄したという事件である。そしてイギリスは、それを口実に、清朝に宣戦布告をし、アロウ号事件と合いまって中国の半植民地化に乗り出したのである。

ゴーシュがこの局面を敢えて取り上げ、広東の外国人居留地の外国人商人たちの視点から描いたのには、私見によれば、次のような理由があったからである。

第一に、この局面は、大英帝国に対する中国外交の輝かしい勝利の局面だったことである。林則徐は、広東到着後、阿片貿易業者やイギリスに対し、国際関係論の立場から道理の通った批判を行い、阿片商人に阿片の放棄と今後阿片を持ち込まないという誓約書への署名を求め、彼らが抵抗すると、外国人居留地を軍隊によって取り囲み、孤立させ、武力を行使することなく阿片の積荷を押収・処分し、中国人から見れば、胸のすくような見事な勝利を収める。

それが一時の勝利に過ぎず、イギリスに宣戦布告の絶好の口実を与えてしまったというのも事実である。そして阿片戦争の勃発とともに、林則徐はイギリスへの融和策を廷臣から進言された道光帝によって罷免されるのである。しかし、当時においてさえ、「英人のあいだでも、敵として歯ごたえのある林則徐は尊敬されていた」という。そして大局的に見れば、林則徐の闘いは、「阿片戦争」をイギリス史上の汚点だ、とする歴史的評価を生み出す大きな力となったのである。『煙』では、外国人コミュニティの側から林則徐を描くことにより、イギリス人商人たちの前に立ちはだかる林則徐の姿をより効果的に描くことができたのである。

第二に、ゴーシュは、出来事を外国人貿易業者の側から描くことによって、外国人貿易業者の間で交わされた阿片貿易を巡る白熱した議論をその内部から描き出すことができたのである。実は、外国人コミュニティは、一枚岩ではなく、阿片貿易推進派と少数ではあるが強力な批判派に分かれており、激しい意見の対立があったのである。

阿片貿易推進論の論陣を張った人々は、皆イギリスのスコットランド出身で、エディンバラ大学でアダム・スミスやマルサスから学んだ最初の弟子の世代に属し、阿片貿易を「自由貿易論」の立場から擁護したのである。だが、彼らはアダム・スミスの名を借り、実はアダム・スミスが『国富論』（1776 年）に先立つ『道徳感情論』（1759 年）で批判していた類の人々であった。他方、ゴーシュは、彼らの「自由貿易論」をキリスト教徒として鋭く批判する論客、アメリカ人貿易商のチャーリー・キング氏を『煙』のなかでは大きく扱っている。そして阿片貿易擁護論と批判論の激しいやりとりを通じて浮かび上がってくるのが、資本の自由な利潤追求活動と道徳性や社会への責任の問題を始めとする、資本主義が続く限り問題となる古くて新しい論点である。従って、本論では、ゴーシュが描いている阿片貿易を巡る論争の整理とその評価を論じることになる。

また、イギリスで禁止されている阿片を中国人には売るという行為の根底には、中国人への人種主義が存在したというゴーシュの視点についても論じる。

第三に、ゴーシュはこの局面を外国人居留地の内側から描くことによって、インドのパーシ（Parsi）（拝火教徒）の阿片貿易商に焦点を当て、彼を主人公に据えた物語を描くことができたのだ。阿片貿易商バーラムは、ボンベイと広東を往復する生活を何十年も経験するなかで外国人居留地での生活にボンベイでは得られなかった新たな人生・自由・愛を見出していたのである。しかし、林則徐の命による広東での阿片への規制の強化により、阿片戦争前夜の広東への航海は、バーラムの最後の航海となり、物語の最後では、外国人商人のなかで唯一入水自殺を遂げることになる。何が彼を自殺にまで追いやったのか？それを明らかにするのも、本論の課題の一つである。

第四に、ゴーシュは、18 世紀中盤から阿片戦争の時期まで清朝が外国との貿易港として唯一開港した広東の外国人居留地そのものを、あたかも「主人公」であるかのように思い入れを込めて描いている。外国人居留地は、1858 年には焼き払われ現存しないのであるが、ゴーシュは、その特異な魅力を、広州やイギリスのロンドンの『海洋博物館』に豊富に保存されている回想録、日記、書簡集、そして沢山の絵画を基に再現しているのだ。広東の外国人居留地は、日本の鎖国時代の出島に相当する窮屈な所なのであるが、それが外国人商人、とりわけインド人商人にもっていた特異な解放感や魅力を明らかにすることも本論の課題である。

２月例会　２０１５年２月２８日　国士舘大学梅ヶ丘学舎

①ウェルフェア・ファイターズの詩と政治――全米福祉権団体（NWRO）の結成

土屋　和代

1996 年 8 月、クリントン大統領は、「我々にお馴染みの福祉を終わらせよう」の掛け声の下「個人責任・就労機会調整法（PRWORA）」を成立させ、20 世紀初頭から全米各地で続いてきた母子家庭への扶助を廃止に追い込んだ。なぜ PRWORA はいともたやすく成立したのか。なぜそれを阻止することができなかったのか。研究者たちは、受給者に対していかにネガティヴなイメージが形成されたか、戦後母子家庭向けの公的扶助がどのように批判の的となったのかを分析し、そこにこたえを見出そうとしてきた。

しかし、〈福祉の危機〉言説と、その言説の欺瞞性を明らかにする研究からこぼれ落ちていたのは、受給者自身の、日々の生活から紡ぎ出された〈声〉にほかならない。本報告では受給者である母親、父親たちが声を上げ、手を組み、立ち上がった時代に遡り、彼女／彼らの息づかい、日々の闘争、その世界観を、受給者が全米福祉権団体（NWRO）の機関紙『ウェルフェア・ファイターズ』に投稿した詩のなかから読み取る。受給者は日々何を考え、感じていたのか。受給者の側がどのような「福祉」像を示し、自らを取り巻く社会へ批判的まなざしを向け、NWRO に希望を見出すに至ったのかを考察する。声を奪われた名もなき人びとの「政治的振る舞い」は、NWRO を生み出し、突き動かし、アメリカ社会を（たとえそれが一時的なものだとしても）根底から揺さぶる原動力となったのではないだろうか。

②ハーレム・ルネサンス期の文芸誌『ファイア！！』――ゾラ・ニール・ハーストンの場合

松本　昇

1926 年 12 月に刊行したハーレム・ルネサンス期の『ファイア！！』について論じた。これはウォレス・サーマンを中心にゾラ・ニール・ハーストン、ラングストン・ヒューズら当時の若き作家・芸術家が年輩の指導者、とりわけ W・E・B・デュボイス、アラン・ロックに反発してできた文芸誌である。当発表では、サーマンらがデュボイスらになぜ反発したのか、組織やパトロンに頼らずに文芸誌を刊行・販売することのむずかしさについて、組織の機関誌の販売方法と比較しながら述べた。そのあと『ファイア！！』の文学史的位置づけ、ハーストンにとってのこの文芸誌の意義にふれた。

報告

会員による出版
『クローテル――大統領の娘』（アメリカ古典大衆小説コレクション 10）
　ウィリアム・ウェルズ・ブラウン著　風呂本惇子訳・解説
　松柏社出版　2015 年 2 月刊行

会員からの投稿

特別講演会『アンダーグラウンドの底力――ヒップホップとアフリカ系アメリカ人文化』についての報告

阿津坂　祐貴

2014 年 12 月 13 日（土）立命館大学衣笠キャンパスにて、ジェイムズ・B・ピーターソン教授（リーハイ大学）による特別講演会「アンダーグラウンドの底力――ヒップホップとアフリカ系アメリカ人文化」が行われた。本報告では、当日の様子や内容を、筆者の感想を踏まえて簡単に紹介したい。なお、本報告では、講演会の内容に合わせて、「黒人」と「アフリカ系アメリカ人」を互換的に用いる。

1. 講演会について

まず、講演会についてである。同講演会は、立命館大学文学部文学研究科、国際言語文化研究所ヴァナキュラー文化研究会による連続講演会「流体としてのことば、文化、地域」の第 5 回として企画されたものであった。当日はまず、ウェルズ恵子氏（司会）、坂下史子氏（通訳）による挨拶、講演者の紹介があり、その後に、前座として、ヒップホップ研究団体 SHIPS(Seminar for Hiphop Studies)によるパフォーマンス／レクチャー「体感型ヒップホップ入門」が行われた。続く本講演では、ピーターソン氏が、新著『ヒップホップ・アンダーグラウンドとアフリカ系アメリカ人文化――表層の下で』（未邦訳、原題 *The Hip-hop Underground and African American Culture: Beneath the Surface*. New York: Palgrave Macmillan, 2014.）の内容をもとに、アメリカ合衆国における黒人の歴史的体験、文学、そしてヒップホップ文化を通底する「アンダーグラウンド・ネス（地下性）」についての講演を行った。その後の質疑応答では、ヒップホップ文化に関するものを中心に多くの質問があり、講演会終了後にも、なおピーターソン氏に続く質問待ちの長い列ができていたのが印象的であった。またアンケート集計によれば、当日の参加者は約 180 人であり、前座のパフォーマンス、講演の内容、質疑応答を含め、総じて好評であったそうである。

2. 内容について

次に、講演会の内容についてである。ピーターソン氏の主題は、アフリカ系アメリ

カ人の歴史と文化には、概念としての「アンダーグラウンド・ネス（地下性）」というものが断続的に現れ、それがそれぞれの時代ごとに異なる含意を持って、黒人文化を特徴づけてきたというものであった。この用語についての明確な定義はないものの、講演の内容によれば、黒人文化における「地下性」とは、おおよそ次の 2 つのことを指し示すものであった。

第一に、地下性とは、アフリカ系アメリカ人の歴史と文化が主流の WASP 中心的なアメリカ社会の「表層の下」で育まれてきたことに起因している。約言すれば、地下性とは、アフリカ系アメリカ人が自らの歴史と文化への繋がり（ルーツ）を認識し、それをたえず文化生産の中で反復、再生産、継承していくことである。そしてこの作業において「重大な記憶」として反復されるのが、中間航路、奴隷制、リンチ、強制隔離をはじめとする黒人の集合的な経験である。

第二に、地下性とは、アフリカ系アメリカ人の言語や文化生産の手法の中に存在してきた。というのも、黒人文化、文学、政治運動における言語的、非言語的表現の中では、しばしば（白人に向けられた）「表面上の意味」と（黒人に向けられた）「実際の意図」とが巧みに区分され、これが白人至上主義の中で生き延びる黒人の抵抗の手段として機能してきた。言い換えれば、地下性とは、アフリカ系アメリカ人が、巧みな比喩、黒人英語（African American Vernacular English: AAVE）、だまし絵や踊りなどを通じて、抵抗の意図を「表層の下に」隠しながら表現することである。

つまり、黒人文化における地下性とは、黒人が自身の歴史と文化との繋がりを継承し、そこから得た自己同一性や抵抗の意図を、黒人のみに分かるよう、言語実践や文化生産の中で表現することであった。ピーターソン氏によれば、地下性の概念は、アフリカ系アメリカ人が、近代における非人間化の現実を生存していく中で発展し、奴隷制廃止運動、黒人芸術運動、黒人文学、そしてヒップホップなどの、芸術・政治運動、ヴィジュアル・カルチャー、美術的技法や文学における言葉の綾の中で繰り返し表現されてきた。

同講演では、「ヒップホップ文化」、「黒人の歴史的体験」、「黒人文学」という 3 つの異なる分野が順に紹介され、それぞれの文化生産、歴史において「地下性」という白人至上主義に挑戦するための概念が繰り返し現れてきたことが指摘された。また各分野における地下性の代表的な担い手として、DJ クール・ハーク、ロック・ステディ・クルー、KRS ワン、ラキーム、TAKI 183、プロジェクト・ブロウド（ヒップホップ文化）、（逃亡奴隷のための）地下鉄道、黒人芸術運動（黒人史）、フレデリック・ダグラス、サットン・E・グリッグス、リチャード・ライト、ラルフ・エリソン、アミリ・バラカ（黒人文学）などがそれぞれ写真とともに紹介された。

こうした中、ヒップホップ研究者としてのピーターソン氏の最大の主張は、（しばしば黒人文化とは切り離されたポストモダンな大衆文化として論じられる）ヒップホップ文化が、まさにこの「地下性」の概念によって、黒人文化の伝統に位置づけられるものであるということであった。ヒップホップ文化において「地下性」とは、しばしば商業化の度合いに関するものだと論じられてきたが（e.g. 大企業から配信されないものが「アングラ」なラップ音楽である）、ピーターソン氏はこれに対し、「社会正義」（白人至上主義に対する抵抗）という主題の有無を「地下性」の条件として提案する。そして、現在のラップ・アーティストの中には、商業的な成功を視野に入れつつも、黒人文化の地下性を継承しているものが多数存在している、というのがピーターソン

氏の最大の主張であった。

この地下性をもっとも巧みに体現するものとしてピーターソン氏が紹介するのが、商業的なヒップホップ・アーティストとされるビッグ・クリット（Big K.R.I.T.）による「祈る男（Praying Man） feat. B.B.キング」（2012）である。同曲においてクリットは、黒人の重大な記憶についての 3 つの物語を、直接そのテーマに触れることなく展開している。このため同曲は、黒人の歴史に精通している者のみが、3 つの物語がそれぞれ、リンチを受け木に吊るされた奴隷、奴隷貿易船から飛び降りた奴隷、リンチから逃亡する奴隷の視点から語られるものであると理解できる楽曲／詩となっている。また同曲はブルース・アーティストである B.B.キングを客演にむかえ、黒人のルーツを音楽的にも反復し、ヒップホップの楽曲として作り直すものであった。講演の終盤でピーターソン氏は、同曲の音楽、歌詞を紹介し、その位置づけを説明することで、「地下性」の要点を振り返り、講演を締めくくった。

3. 感想など

最後に、筆者の感想についてであるが、ここではヒップホップ文化に携わるもの、黒人研究の初学者、そして大学院生として感じたことを、それぞれ簡単に記しておきたい。

まず、実践と研究の面でヒップホップ文化に携わるものとして、同講演の開催は、日本のヒップホップ文化・研究のさらなる発展に寄与したものであると感じた。繰り返し指摘されることであるが、「ヒップホップ」とはラップ音楽の同義語ではなく、ポスト公民権時代（1965 年以降）におけるアフリカ系アメリカ人の集合的意識を軸に形成されるひとつの文化圏そのものを指し示す用語である。そのため、歌唱様式としてのラップ、DJ、ストリートダンス、服装、思考様式、そして学術研究の全てを同時に含んだ同講演は、(メタ的にいえば) それ自体がヒップホップ的な空間を形成しており、参加者が同文化の全体像を体感できる貴重な機会になったのではないかと感じた。また、ヒップホップ研究がまだ浸透しはじめたばかりの日本において、同講演は、合衆国における最新の研究を日本に紹介する貴重な機会になったと思われる。

次に、現在筆者は、アメリカ連邦議会における「黒人議員コーカス（the Congressional Black Caucus）」の展開についての政治学的研究に取り組んでいるが、同講演を通じて、黒人アメリカの全体像をつかむ上での文化生産（文学や音楽を含む）の重要性を学んだ。また、言語学、文学、カルチュラル・スタディーズ、黒人研究の異なる理論枠組みを巧みに使い、「地下性」という一つの概念によって、アフリカ系アメリカ人の歴史と文化を理解しようとするピーターソン氏の試みは、しばしば学問的細分化の中で視野狭窄に陥りがちな筆者に、広い視野を持つことの妥当性を教えてくれた。筆者は、ある地域／対象を全体的にかつ外部から考察し、その固有性を抽出するという意味での「地域研究」に学問的作法を学んでいるが、ピーターソン氏のダイナミックな議論は、黒人アメリカを地域研究するという点でも、示唆に富むものであったといえる。

最後に、大学院生として筆者が同講演から学んだこととして、質疑応答におけるピーターソン氏の巧みさが挙げられる。フロアから質問を受け、これに答える中で、ピーターソン氏は常に質問と自身の議論との関係を明らかにし、結果的に「質問者に講演の内容を補完させる」という手続きを取っていた。限られた時間における議論とは、往々にしてそこで語りきれない部分を生み出してしまうが、ピーターソン氏はこの部

分を質問者に代弁させることで、質疑応答をディフェンスではなくオフェンスの時間へと転換させていた。こうした手法をヒップホップにおける「サイファー」（円を構成し、その中で各人が即興のラップやダンスを、他の参加者のものと結びつけながら行うこと）の概念から学んだのかどうかは定かではないが、壇上に立つ研究者としては見事な応答であった。筆者はこの点から多くを学び、研究者とは常に発表者としての責任を持つということを教えてもらった。

このように、豊かな議論と構成からなる同講演は、筆者を含め多くの参加者にとって大変意義のあるものであった。

ニューヘーヴンの四ヶ月

木内　徹

フルブライト上級研究員として平成 26 年 10 月から平成 27 年 3 月までの六ヶ月間の契約で、イェール大学客員研究員の身分でコネチカット州ニューヘーヴンに住んでいる。イェール大学にはバイネッキ稀覯書図書館があり、ジェームズ・ウェルドン・ジョンソン黒人コレクションが著名である。私は主にこのコレクション調査を目的としてニューヘーヴンにやってきた。当コレクションは 1941 年にカール・ヴァン＝ヴェクテンによって創始されたもので、アフリカ系アメリカ人の作家、芸術家、ハーレム・ルネッサンスなどに関する資料が所蔵されている。チェスター・ハイムズ、ラングストン・ヒューズ、ジーン・トゥーマー、ゾラ・ニール・ハーストン、クロード・マッケイ、アーナ・ボンタンの遺した原稿、書簡、未刊行の書類が保管されており、特にリチャード・ライトの完璧なコレクションが知られている。

ジョンソン・コレクションは日々増大し続けており、近年、黒人詩人のコーニーリア・イーディーとトイ・デリコットが 1996 年に創始したキャヴィー・カネム(Cave Canem)関係資料のすべてを購入した。キャヴィー・カネムは新進気鋭の黒人詩人を育て、助成金を提供する機関である。今後、多くの黒人詩人が成長した跡を追跡できるコレクションとなることが期待される。

私としては、この四ヶ月のあいだ、リチャード・ライトの資料収集に専念している。この図書館に初めて来てから十五年経つが、いまも図書館のキュレイターさえも気がつかない発見がある。ライトには英語俳句四千句が未刊として遺されていることが知られるが、私の調査ではさらに句数は増えることがわかった。

十五年前は、アメリカ図書館で資料のコピーを頼むと、一枚 20 セントほどでマイクロフィッシュやマイクロフィルムにして後送してもらい、それを日本に帰ってからプリント・アウトしていたものだが、それは今や昔、最新の利用法は写真撮影自由となっている。つまり、無料でいくらでも資料のコピーができるということだから便利になったものだ。

ゼロックスコピーやマイクロフィッシュと違って、写真は色や風合いを写し取ることができるのが大きな利点である。リチャード・ライトは、自分の気に入った俳句に赤い丸と青い丸と黒字の書き込みと、さまざまに色分けして書き込んでいた。今まで

のコピーではこれに気づかなかった。写真撮影しておけば、これはあとから確認できる。その点が大きな進歩と言える。

さらに、第二次世界大戦中の紙が不足した時代は作家の使用した原稿用の紙が茶色で実に悪くて脆い。手に持つとはらはらと崩れてしまうような紙に、手書き、タイプなどで書いてある。しかし 1950 年代になると上質の固い紙が使用されるようになる。これはゼロックスコピーでは判断できない。写真撮影しておけば書かれた原稿の年代特定ができるのだ。

私の日常は、図書館での資料調査のみならず、フルブライト上級研究員の義務として、他大学へ講演に行かなければならない。これは一ヶ月に一度ほどの割合で行わなければならず、なかなかに忙しい。すでに、フィラデルフィアのテンプル大学黒人研究学科と、ペンシルヴァニア州のウェストチェスター大学フレデリック・ダグラス研究所に行った。これから二月と三月には、黒人大学であるミシシッピー・ヴァレー州立大学において「グリーンウッドにおけるリチャード・ライト」という演題で、ニューオリンズのアメリカ唯一の黒人カトリック大学ゼイヴィア大学において「リチャード・ライト年譜」という演題で、ピッツバーグ南郊のウェインズバーグ大学において「アメリカ俳句」という演題で、それぞれ講演することになっている。

それにしてもアメリカ東部の冬は寒い。昨日、1 月 27 日は大寒波襲来で図書館と大学が閉鎖になった。1 月初旬に MLA における発表のためカナダのヴァンクーヴァーに赴いたが、帰途、ニューヨーク行きの飛行機がすべてキャンセルされ、空港に丸一日足止めされることになった。この東部の厳しさに堪えなければ学問の遂行は成らないのかと思う。

アトランタ滞在報告

梶原　克教

2013 年 9 月から 2014 年 3 月までの 6 ヶ月、愛知県立大学学長特別研究費を受給し、合衆国ジョージア州アトランタの Morehouse College にて客員研究員として在外研究をおこなってきました。Morehouse College といえば、本学会員の皆さんにとっては Martin Luther King Jr.の母校ということで知られているのではないでしょうか。実際、大学内には MLK International Chapel をはじめとして MLK 関連のモニュメントが多く存在します。それに加えて、映画にご関心がおありの向きには、映画作家 Spike Lee や俳優 Samuel L. Jackson の母校であることや、両者が同大学をモチーフとしてセッションした映画 *School Daze* を思い出されるかもしれません。しかし今回の私の研究は、そうした分野ではなく C. L. R. James や Eric Williams をはじめとしたカリブ海知識人の活動記録に関するものでした。

Morehouse College はアフリカ系アメリカ人を代表する大学として広く知られているものの、実はむしろカリブ研究と強いつながりを持っています。というのも、当大学は、1997 年から毎年開催されている国際カリブ文学会(International Conference on Caribbean Literature 以下 ICCL)の主催校であるだけでなく、その英文学科のスタッフの多くがバハマ、ヴァージン諸島、ジャマイカ、といったカリブ諸国の出身者によって占められているのです。しかも、カリブ文学といっても学会の多くが英国や合衆国

といった大国（旧宗主国と現在のヘゲモニー行使国）で開催されるのが主流の中で、ICCL は毎年カリブ諸国で開催するという点において傑出しています。これまでの開催地にはキューバやハイチも含まれています。合衆国の大学がそうした国で学会を開催することの困難さを考慮すれば、ICCL の志の高さがわかるというものです。

ICCL の主催校 Morehouse College は、上述のようにカリブ文化研究と強いつながりがあるがゆえに、当該研究関連の資料を多く備えています。ただし、その資料の所在については少し変則的な形をとっているので、簡単にご説明申し上げたいと思います。アトランタにはエモリー大学をはじめとする様々な大学がありますが、Morehouse College は大学組織 Atlanta University Center Consortium（以下 AUCC）の一角を占めています。AUCC は中西部に隣接し合う Clark Atlanta University、Morehouse College、Spelman College および Morehouse School of Medicine から成ります。Morehouse College は男子大で Spelman College は女子大です。学生は各大学に所属しますが、講義に関してはどの大学のものを受講しようと自由です。ですから、男子大の Morehouse 学内でも普通に女子学生が歩いているといった具合です。

AUCC の各大学は独自の図書館を持たず、代わりに全大学で共有する Robert W. Woodruff Library を持ち、今回の私の主な研究場所はその図書館でした。アトランタといえばコカ・コーラの本拠地であることでも有名ですが、この図書館の名前となっている Robert W. Woodruff は 1923 年にコカ・コーラの社長に就任した後、マーケティング戦略としてのブランディングを海外でも展開し、コカ・コーラを世界的ブランドにした人物です。このあたりがいかにも合衆国的なのですが、アトランタの多くの大学や研究施設がこの人物からの寄付金を多く受けてきました。その Woodruff が地域貢献として AUCC のために作ったのがこの図書館なのです。残念なことに試験前を除くと利用者は驚くほど少なかったのですが（そのぶん私は集中できましたが）、お金のかかっている図書館だけに、貴重な資料を数多く入手できました。研究の成果に関しましては、今後の学会発表や論文のかたちで皆様にお目にかけることができると思いますので、ここでは詳述を控えますが、今年 3 月に刊行される『多民族研究』第 8 号「シンポジアム特集」に関連した拙文が掲載されますので、ぜひご覧いただければと思います。

今年の合衆国も、寒波の影響により各地で様々な難事が報告されていますが、私が滞在していた昨冬も半世紀ぶりの寒波ということで、それなりの困難にも遭遇しました。「ホットランタ」という通り名が信じられないほどの寒さで、そもそも雪が降ること自体あり得ない土地なだけに、はじめて雪が降った日は市の諸機能が停止するほどの災難となりました。というのも、雪の経験がないために、降雪予報が出ていてもチェーンを巻いたりスノータイヤを履いたりする発想がないわけです。完全な車社会であるがゆえ、何マイルにもわたりハイウェイで車が立ち往生して一晩中車内で過ごさざるをえない人が続出し、危機管理に関する知事と市長の責任問題にまで発展しました。そのせいで、今年は少しでも寒波が予想されるとすぐに、公立の施設や学校が休業・休校の措置をとる傾向にあるとのことです。

わずか半年の滞在でしたが、今後も ICCL を通じて Morehouse College との関係を継続してゆくつもりです。これまでも本学会員のなかから ICCL への参加する方々がいらっしゃいましたが、今後も多くの方が参加されることを願っております。開催は 11 月初旬から中旬にかけてで、例年 5 月くらいに CFP が来ますので、その折にはあらた

めてお知らせできればと思います。以上、簡単ですがご報告とさせていただきます。

雪と氷の世界――ケンブリッジより

柳楽　有里

平成 27 年 1 月 20 日から Visiting Fellow としてハーバード大学に留学しています。ケンブリッジというボストンの隣の市に住んでいます。ここに到着してからまだ約一ヶ月しか経っておらず、悪天候も重なり思うように行動できないこともあり、研究成果をご報告できる段階ではありませんので、ケンブリッジでの一ヶ月の経験を少しご紹介させていただきたいと思います。ハーバード大学では、ヘンリー・ルイス・ゲイツ・ジュニア（Henry Louis Gates Jr.）教授の授業を聴講しながら、博士論文の執筆に取り組む予定です。私の研究対象はグロリア・ネイラー(Gloria Naylor) ですが、そのことをゲイツ教授にお話したところ、彼はイエール大学時代、当時大学院生であったネイラーを直接指導していたことがあるそうです。

私が聴講している授業は学部生向けの講義であり、interdisciplinary course の一つとして提供されているものです。前半がゲイツ教授、後半はローレンス・ディ・ボボ(Lawrence D Bobo)教授が担当することになっています。アフリカン・アメリカンの文化や歴史を多面的に考察することが授業の目的です。学部生向けの授業ということもあって、幅広いトッピックの重要な部分のみをカバーする内容になっていますが、扱う文学作品や映画や批評は膨大な量で、一つずつ時間をかけて読むだけでも新しい発見があります。また、授業以外にもセミナーやワークショップが提供されているので、これから積極的に参加していきたいと思います。

ハーバード大学があるケンブリッジ市は小さな町です。歴史的名所を歩いて巡るツアーがあるようなのですが、春が来るまでお預けです。大雪のためほとんど外に出られない日々が続いております。到着してちょうど一週間後の 1 月 27 日に大寒波がやってきました。過去最大規模のストームになる可能性があると連日ニュースで伝えられていました。（結局過去最大ではなかったそうです。）この日以来、ここケンブリッジは次々と大きなストームに襲われ、大学は三回閉鎖され、また大雪の為企画されていたイベントなどが次々に延期されました。この辺りは雪が降らない地域ではなく、学校が雪で休校になることはよくあるそうですが、ここまで集中的にストームがやって来るのは、またここまで寒い冬は珍しいそうです。気温は毎日マイナスが続いています。過去二番目に寒い冬だとニュースで聞きました。大寒波の際、実はボストン市内の病院へ行っていたのですが、病院からタクシーで帰宅した時は生きた心地がしませんでした。吹雪の中、やっとのことでタクシーを捕まえて安心したのはつかの間、そのタクシーが何度もスリップするのです。おそらくノーマルタイヤで走っていたのでしょう。ドライバーの緊張感が私にも伝わってきました。車が古かったせいかフロントガラスは曇り止めが機能しておらず、ほとんど前が見えない状態で三十分かけて帰宅したことは忘れられません。

研究報告というよりはむしろ雪の報告になってしまったように思われます。帰国までには皆様にご報告できるような成果をあげることができるよう、一層精進してまいりたいと思います。

入　会　者

穴田　理枝（あなだ　りえ）氏
所属：大阪大学、近畿大学、京都精華大学（非常勤講師）
自己紹介：20 数年間の社会人生活を経てから大学院に入学し、そこでアメリカ演劇に出会いました。大阪大学大学院博士課程を単位取得退学し、現在は大学で非常勤講師をしながら少しずつ勉強を続けています。アフリカ系アメリカ人現代演劇作家、August Wilson, Suzan-Lori Parks らの演劇作品に描かれるアフリカ系アメリカ人の歴史や文化について学ぶうち、ご専門とされる先生方の深いご研究にふれる機会を得る必要性を感じ、黒人研究の会に入会させていただくことにいたしました。どうぞ宜しくお願いいたします。

丸山　峻一（まるやま　しゅんいち）
所属：オハイオ州立大学アフリカンアメリカン・アフリカンスタディー学部
自己紹介：将来、Black Studies の教員になることを目指し、現在はオハイオ州立大学で修士課程をしています。研究テーマは、African Diaspora の観点から、20 世紀前半の Afromodernisms の再考です。特に、1920・30 年代のフランスとアメリカの間での黒人交流に焦点を当て、黒人知識人の交流だけでなく、大衆文化がどのように黒人文化に影響を受け、Transnational Black Racial Identity を構築してきたかを研究しています。まだまだ知識不足の新米の大学院生ですが、今後ともよろしくお願いします。

西田　桐子（にしだ　きりこ）
所属：東京大学（院）　比較文学比較文化専攻
自己紹介：自己紹介：日本文学における黒人表象に関心があります。「黒人」が登場する日本語の小説や詩を収集しつつ、特に近年は、1950、60 年代の日本における、文学・芸術運動と「黒人文学」「黒人芸術」受容の関係に着目しています。日本の小説に「黒人」がどのように描かれ、なぜそのように描かれるのか、という素朴な疑問から出発したはずが、アフリカ彫刻から日本の戦争責任まで、考えるべき問題がどんどん広がっている最中です。ある意味では研究対象でもある、黒人研究の会に入会することができて、とても感慨深いです。どうぞよろしくお願いいたします。

（順不同）

会計からのお願い

① 本会報に 2015 年度会費納入用の振替用紙を同封しております。
年会費：　6 千円
振替番号：00910-6-148435
名義人：　黒人研究の会

② 第61回全国大会懇親会費（一般6,000円、院生4,000円）、及び2014年度未納会費を共に振込まれる方は、同振替用紙の「備考欄」に内訳をご記入の上合計金額をお振込みください。

③ 黒人研究の会ホーム・ページ(http://home.att.ne.jp/zeta/yorozuya/jbsa/)の「入会案内」からPayPalで会費を納入できます。ご利用ください。(但し、PayPalご利用の場合は、手数料300円が加算された6,300円が毎年自動振替となります。)

編集後記

会報第79号の「会員からの投稿」欄に、木内徹、梶原克教、柳樂有里の各氏がイェール大学、モアハウスカレッジ、ハーバード大学における研究生活の様子を記して送って下さった。現地へ行ってみなければ分からない各大学の事情を知ることができ興味深く読ませて頂いた。これから留学を計画されている方々は参考にしていただければと思います。また、今回「報告」欄に会員による出版物一件を掲載しましたが、出版や学会発表された時には、sato5945@yahoo.co.jp 井上までお知らせください。情報を共有する場として、会報を有効に活用していただけることを願っております。よろしくお願い致します。

（井上　怜美）

＜編集＞　黒人研究の会・編集部
〒603－8577　京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学国際関係学部・加藤恒彦研究室気付

＜編集者＞　井上　怜美

ホーム・ページアドレス
http://home.att.ne.jp/zeta/yorozuya/jbsa/